

ちよんごころこころ

第一四一人を残す

「ぼんたか」のチラシに、お釈迦様との約束とあり、「*争いをしない *話し合いで解決する *差別をしない *殺さない、殺させない *盗まない *分け合えば余る *笑顔は世界のパスポート」と書いてありました。信仰は祈り、拜み、崇拜することによって、共に合掌の姿になれ、家族の平和、地域の平和、国の平和へと広がり、世界の平和へと繋がっていきます。それが仏教、私は、お釈迦様の教えであると思っています。

芥川龍之介と言えば「羅生門」・「鼻」・「河童」・「俊寛」が有名ですが、彼の功績は偉大で現在でも、芥川賞と言えば、直木賞と共に文学賞の最高峰に成っています。私でも知っている作家は、昭和十年に「普賢」で石川 淳氏・昭和二十四年に「盗牛」で井上 靖氏・昭和二十七年に「喪神」で五味康祐氏・「小倉日記」で松本清張氏・二十九年に「驟雨（にわかあめ）」で吉行淳之介氏・三十年に「白人」で遠藤周作氏・「太陽の季節」で石原慎太郎氏・三十三年に「飼育」で大江健三郎氏・三十五年「夜と霧の隅で」で北 杜夫氏・三十六年に「鯨神」で宇能鴻一郎氏・三十八年に「ジャーニー」で田辺聖子氏・最近では、私の世話に成った方の息子さんで平成十四年に「アサツテの人」で受賞された、諏訪哲史さん。私でも知っている方々です。その龍之介氏曰く、「人生は一箱のマッチに似ている。重大に扱うのはバカバカしい。重大に扱わなければ危険である。」と、彼は、才能あれども、若くして自死してしまいました。三浦朱門氏の奥様・曾野綾子女史は、生きるという言葉には、二つの意味があり「一つは生物として、病気もせず、死にもせず生きること。もう一つは、自分の心が生きること。肉体が生きていてかいがあ、と思うことです。そのどちらもなかったら、この世はすでに地獄でしょう」と。芥川龍之介氏には、生きて生きて、もっと活躍してほしかった、と思っています。

二月十一日に逝去されました、野村克也さんの語録が「中日新聞にのっていました。監督最後の言葉として「財を残すはⓉ、仕事を残すはⓊ、人を残すをⓇとする。野球界に人を残す事ができて少しは貢献できたかな」と申されました。私は流石であると感心しました。姿そのものによって感動を呼び覚まし、敬愛と敬仰の念を起こさせる。正に修行中の菩薩の姿でしょう。

輝く太陽の元に立てば、己の影が色濃く残ります。人生も斯くの如く表舞台で活躍しようとするればⓉと陽のバランスを保たなくては長続きしません。曇りがちの人生は、陽に進めるか、陰に落ちるかかの分岐点です。雨に叩かれれば、這い上がるのにとっても苦労します。人生は如何に人間として恥ずかしくない行動ができるかにあると思います。我々が心がけたいのは「素直な人・控えめな人となり、威張らない人であり・温かい人に成ることです」。怒れば般若の相となり、人は遠ざかり、難となって帰ってくるだけです。自分の益に成る物はありません。忿怒の形相をした仏像は我々が業（悪業）に狂えばろくなことにならないと見せしめているのです。怒り狂う時、己の状態を鏡で見ると良い。

棟方志功画伯の版画を見れば、「偉そうな格好をして、何様の積もりかい」と言っているように思えてなりません。事に遭遇した時、救いを佛に求める事があるでしょう。佛様は老若男女問わず、貧富も問わず、地位のあるなしを問わず、全ての人々を平等に、救いの手を差し伸べて下さいます。まず

第一に、佛力（神力演大光 普照無際土 消除三垢冥 広済衆厄難）に身を委ねてみることで。第一に「歓喜踊躍して善心生ず」とあります。信仰心に目覚めず、生きていく事ほど悲しいことはありません。

彼岸會は二十二日です

令和二年三月一日

善壽男善入院油掛地藏尊